

「開業医のための消化器クリニック」

多賀須消化器科・内科クリニック 多賀須幸男 著

大船中央病院内科

上 野 文 昭

20 世紀最後の年を迎えた今、医学情報が氾濫している。論文は星の数ほどあり、主だった論文に目を通すことさえ不可能となってきた。多忙な臨床医はコンパクトにまとめられた成書を手にするにより、整理された知識を得るのが効率的と考えられるが、毎年出版される成書の数が増え、膨大である。一体全体どのようにして、自分の診療に役立つ医学書を選べばよいのだろうか？

数多い医学書の中から自分の診療に見合った 1 冊を選ぶとき、筆者はまず本のタイトルと編者や著者を重視する。自分の興味に合致したタイトルで、信頼できる医師により書かれたものならば第一関門クリアであり、次にその内容を検討することになっている。さて本書は、わが国の消化器病学の重鎮、多賀須博士の執筆による「開業医のための消化器クリニック」である。その中身を拝見する前から、筆者は強い衝撃を受けてしまった。何と言う多芸多才な方であろうか！

言うまでもなく多賀須博士は消化器病学のリーダーであり、日本の内視鏡学を発展させた最大の功労者の

1 人である。先人の努力による財産のお裾分けをいただいているわれわれ中堅消化器医は、常々畏敬の念を抱いている。一般論で言えば、最先端の研究者は優秀な学者として尊敬に値しても、臨床能力に疑問符がつくことが少なくない。しかし多賀須博士は、研究施設、市中の中核病院、そして個人クリニックと、あらゆる場面で第一人者となられた。特に開業されて数年の間に、このようなモノグラフをまとめられたエネルギーと才能は驚嘆に値する。

さて内容に目を通すと、実地消化器診療の場で必要な知識とコツが、明快な構成のもとに簡潔に述べられている。診断的検査に関しては、内視鏡が充実しているのはもちろんであるが、今は実際にされていないという消化管造影や、日常診療で必須の腹部エコーに関する懇切丁寧な記載は、決して他の成書にはみられないものであり、著者の真摯な診療から得られた広い意味での技術を読み取ることができる。治療面では、一見すると専門家による経験的ノウハウの伝授のように思えるが、実はなかなか科学的な部分も少なくない。

例えば潰瘍治療の項では、個々の薬剤の有用性に関する evidence を踏まえて、実地診療で適用するための考え方などがさりげなく記載されている。多くの消化器専門医の過った薬の使い方とは一線を画するものである。総じて言えば、本書の骨子は豊富な臨床経験に基づいた“頭脳の技”である。実はこのような基本診療技術こそが、これからの EBM (evidence based medicine) 時代に重視されるべきである。適切な臨床技能と健全な判断力は、EBM の重要な要素であることを強調したい。

よい本には、読み始めると部屋の温度がスーッと下がるような戦慄を覚えるものと、ほのかな温もりと喜びを全身で感じとれるものの 2 種類があるような気がする。本書は後者に属し、Maestro の奏でる芸術にも似ている。開業医のみならず、日常消化器診療に携わる若手・中堅勤務医にも広く推薦したい。

● A5 頁 160 図 21 写真 46
カラー写真 24 表 16 1999
定価 (本体 3,400 円 + 税) 円 400

—医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)